

資料涉猟余話

その110

四、天龍川を下る浅井洌

翠朝五時半、開善寺を出発して半里ほどで時又に着いた。かねて郡役所を通じ井原文平という通船会社に依頼して五艘の舟を手配させたのだが、準備がまだ整わず、すぐに乗ることができなかった。舟一艘の買い上げ代金は十八円で、五艘だから九十円となった。一艘の乗客は凡そ二十人、舟子(船頭)三〜四人である。舟の長さは三間余、幅は四尺に過ぎない。約一時間ほどで準備が整い、七時過ぎに纜を解いて時又を出発した舟は、櫂や櫂の力を借りずとも矢のように進んだ。舟子が舳(船首)と舳(船尾)について、方向を定めたり、舵を操ったりするだけである。

浅井洌の飯田下伊那紀行

明治二五年の修学旅行記より④

鎌倉貞男

川の両岸は険しい絶壁で、水中は所々に巨岩が潜んでいる。境までは約十一里、遠州中野町までは三十里ばかりだと答えて、その内、四分の三の航路は艱難を極めると言った。我々は最初その言葉に疑いを持たなかったが、舟の下りにつれてそれが嘘でなく、舟中の人はこ

ろとく魚腹に葬られた。そればかりか、かえって言葉以上の凄さを感じた。その上、過日来の降雨で水量が増し、平日より数尺も水位が上がっているらしく、舟子も気を引き締めているように見えた。その舟子に、船頭に各所の名称を問う、その様子を筆記

今、仮に頼山陽や齊藤拙堂のような能文の士がこの様子を記したならば、二人が書いて有名になった「耶馬瀨の山水」も「月ヶ瀬の梅花」も、恐らくその美名を保つことができなかったらう。古人は、山水もまた幸不幸があると云った。私はまだそれら両地を見ていないが、この川を下るにつれてその言が真実であることを悟った。以後は少しく原文

を掲載し、その名文を熟読玩味されたい。斯て猶下ること数里。河は愈々重山深谷の間に入り、益々高く聳え、絶壁万仞頭上に崩壊せんとし、河中到る所に巉巖暗礁縦横星散して、或いは深淵となり、或いは漲瀑となり、波浪を起し飛沫を生じ、雲霧濛々として虹蜺を現はし、舟中の人之が為に衣襟内外濡れに濡れて、更に乾ける所なく霏然たり。…

浅井は、舟行がよほど怖



浅井洌愛用の硯 (『浅井洌』より)

た。続いて「先に明治乙酉の年、日下部鳴鶴翁此地に遊び、巨岩十所の称号を撰び、自ら筆を揮いて「天龍峽十勝」の事を述べる。曰く「姑射橋、曰く帰鷹岩」と列記し、それ

を掲載し、その名文を熟読玩味されたい。斯て猶下ること数里。河は愈々重山深谷の間に入り、益々高く聳え、絶壁万仞頭上に崩壊せんとし、河中到る所に巉巖暗礁縦横星散して、或いは深淵となり、或いは漲瀑となり、波浪を起し飛沫を生じ、雲霧濛々として虹蜺を現はし、舟中の人之が為に衣襟内外濡れに濡れて、更に乾ける所なく霏然たり。…

浅井洌も感激した天龍峽 (『蘇る伊那谷の明治』より)